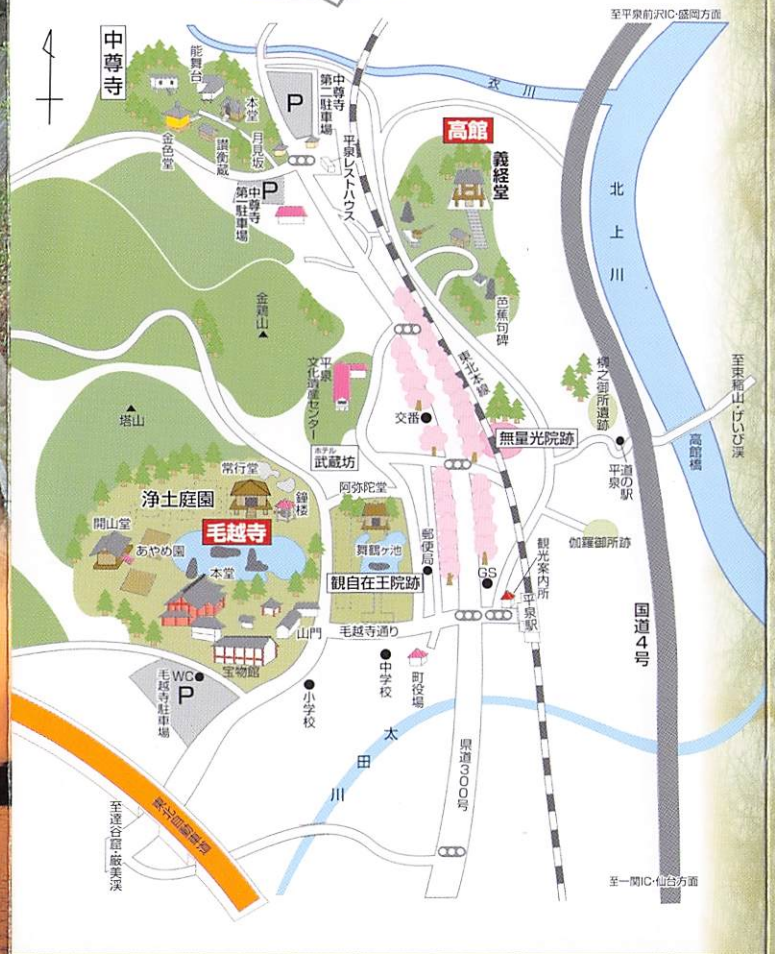
岩手・平泉

高館義経堂

義経終焉の地



高館・義経堂

☎0191-46-3300

●お問い合わせ　毛越寺
〒029-4102　岩手県西磐井郡平泉町大沢
☎0191-46-2331

芭蕉と奥の細道

義経堂から東を望むと、北上川の向こうに秀峯・束稲山が見えます。この山は、かつて安倍頼時の時代に、桜の木を一万本植えたといわれる桜の名所でした。黄金文化華やかし藤原三代のころには、さぞや見事な花が山々や川面を彩ったことでしょう。

俳聖・松尾芭蕉が門人・曽良を伴い、平泉を訪れたのは元禄二年（一六八九）旧暦五月十三日（六月二十九日）のこと。高館に立ち、眼下に広がる夏草が風に揺れ光る様を眺めた芭蕉は、百年にわたり平泉文化を築き上げた奥州藤原氏の栄華や、この地に散った義経公を思い、かの名句を詠みました。

三代の栄耀一睡の中にして、大門の跡は一里こなたに有。秀衡が跡は田野に成て、金鶏山のみ形を残す。先高館にのぼれば、北上川南部より流る、大河也。（中略）「国破れて山河あり、城春にして草青みたり」と笠打敷て時のうつるまで泪を落し侍りぬ。

夏草や
兵共が　夢の跡

芭蕉直筆拓本

松尾芭蕉句碑

奥州平泉にはかなく散った若き英雄・義経。
この景観に心熱くし、風の声を聴く。

高館　義経堂

高館は北上川に面した丘陵で、判官館（はんがんだて、ほうがんだて）とも呼ばれています。現在では、その半ばを北上川に浸蝕され狭くなっていますが、この一帯は奥州藤原氏初代清衡公の時代から、要害地とされていました。兄・頼朝に追われ、少年期を過ごした平泉に再び落ち延びた源義経公は、藤原氏三代秀衡公の庇護のもと、この高館に居館を与えられました。地元で判官館と呼ばれているのは、義経が判官の位にあったことに由来します。しかし、文治五年（一一八九）閏四月三十日、頼朝の圧迫に耐えかねた秀衡公の子・泰衡の急襲にあい、この地で妻子とともに自害したと伝えられています。丘の頂上には、天和三年（一六八三）、仙台藩主第四代伊達綱村公が義経を偲んで建てた義経堂があり、中には義経公の木像が安置されています。高館からの眺望は平泉随一といわれ、東にとうとうと流れる北上川、東稲山（別名・東山）が見えます。また西からは、かつてその流域で前九年・後三年の役の戦いの場であり、弁慶立往生の故事でも知られる衣川が北上川に合流しています。

源義経公像

義経堂の堂内に、本尊として祀られているのが、堂創建時に製作された木造の源義経公像です。凛凛しい武者姿の像は、極めて綿密に作られており、その技法には製作した時代より古い時代のものも見ることができます。その特徴は、

一、頭部と兜とが別作りであること
二、髻が付いていること
三、鎧の上に衣を装っていること

などがあげられます。勇ましい甲冑姿は、若き英雄・義経公の在りし日のお姿を彷彿とさせます。

源義経主従供養塔

宝篋印塔（ほうきょういんとう）

昭和六十一年、義経公主従最期の地であるこの高館に、藤原秀衡公、源義経公、武蔵坊弁慶八百年の御遠忌を期して、供養のために塔を造立しました。祖父、父の志を継ぎ、奥州藤原文化を築き上げた秀衡公、運命に翻弄され、この平泉で三十一歳という短い人生を終えた義経公、そして、義経公を信じ戦い抜いた弁慶。それぞれの生涯に思いを馳せ、心からの供養を行うのに、この高館はふさわしい場所だと思われます。